

## 第九節 欧米旅行中の長与専齋

長崎医学学校長長与専齋は明治四年九月二日（一八七一年十月十五日）、岩倉大使一行と共に、欧米医事制度調査に出向いたが、明治四年十一月十二日（陽曆十二月二十三日）、横浜を出帆し、十二月六日（一八七二年一月十五日）、サンフランシスコに着いた。一行は同月二十二日（陽曆一月三十一日）、同地を出、ソートレークに至り、その年を送った。明治五年一月中旬、ソートレークを出、ワシントン経由、二月中旬、ニューヨークに至った。そこから英国リバプールに着き、三月一日（陽曆四月八日）、ロンドンに赴いた。一ヶ月余の後、パリに至り、四月中旬（陽曆五月）、パリを発してベルリンに向った。その後オランダに出てアムステルダムでその年を終ったが、明治六年（一八七三年）一月中旬、ベルリン、パリを経、二月一日にはフランスのマルセーユを出帆し、三月四日、長崎に着いた。そして大村に帰郷し、三月六日、長

崎に出て、更に東京へ上ったが、明治五年二月二十一日（一八七二年三月二十九日）、文部省に設けられた医務課が明治六年三月二十三日、医務局に昇格され、帰朝勿々の専齋がその局長に就任し、医制取調を命ぜられた。これがわが国の衛生業務の発端である。

このような衛生行政の嚆矢をなした医制の準備に忙殺されていた専齋に代る校長としては前記坂井直常が校務を司ったのである。専齋の洋行中に見聞した衛生行政の実態はわが国のそれに比して誠に驚愕に値するものであったが、この時の見聞は明治以後のわが国の衛生行政の方針をほぼ決定したものである。一方、専齋を失った長崎の医学校は名將を失った軍団の如く、衰退の一路をたどらねばならなかったが、集団の形式を持つ学校教育の最高の責任者の配慮が不用意でなければ、常に新鮮な研究を推進し、立派な学風を樹立することもできるもので

## 第九節 欧米旅行中の長与専齋

あり、学問の自由や学校の維持は守られ、有為の人材を輩出せしめ得るものである。およそ学問の府の長たるものは粗漏であつてはならず、円満なる人格者で然も機敏な人士でなければ、学生をして誤つた方向に走らせるものである。なお、長与専齋の欧米旅行中も、長崎県では衛生行政が渋滞していた訳ではなかった。然しまだ充分な衛生的な基礎がある訳ではない。ここでは明治五年六月、長崎県庁が市郷戸長に対して發した入浴等に関する達を示そう。

当県下旧來の陋習にて湯屋ニ男女雜浴し或は裸體にて外見を憚からず往還ニ於て又ハ路傍猥に小便いたし候等の醜風滅せず方今開化日ニ進み月ニ盛なる秋最耻へき事にて既ニ他所ニおゐては右様の習弊ヲ嚴禁し良風ニ移リ候由殊ニ開港場ハ小事ト雖も御国體ニ關係すへき所行者各自注意すへき筈ゆへ向後湯屋共ニ於テ可成速ニ男女別ニ入浴する様取補理良又童兒ニても裸體戸外ニ出てす婦人ハ勿論男子ニても店先等外ニ見通しの場所に全身或ハ半身を露し出浮キ又ハ路傍に於テ婦人者無論男子と雖も人家近ニ而猥ニ小便ホ致すへからず若此旨趣を等閑にいたし心得違之者あらは羅卒戸長等にて見当り次第屹度咎申候へし

右之通申渡候条一同篤与布達之趣意体認致し区内無泄触示懇々説諭可致事

壬申六月

県庁

市郷戸長へ

このようにまだ男女の混浴や裸体外出、立小便などの風習が行なわれていた時代でもあったが、最も外国人との接触の多かった長崎では衛生的な見地からではなく、主として道德的見地から取締が行なわれていたのである。これは恰も現行法中の輕犯罪法に当るもので、明治初期の衛生關係法規としては特異なものである。